

## 第34回 山科義士まつり

写真コンクール入賞作品

昨年12月14日に行われた山科義士まつりをテーマにした写真コンクールにおいて、上位に入賞された方の作品を紹介します。

山科義士まつり  
実行委員会会長賞



「市長第一声！義士まつり」  
寺島正英さん

山科区長賞



「叩きたい」  
小泉隆行さん

大石神社賞



「私も義士よ」  
西村弓子さん

京都新聞社賞



「勢揃い」  
城野幸雄さん

入選



「私は間喜兵衛です」  
岡田史郎さん



「いざ参らう」  
中道修さん



「ちびっこ義士」  
関伸子さん



「義士隊行列」  
西沢敏子さん



「義士凱旋」  
谷泰雄さん

問合せ先  
区まちづくり推進課 (☎592-3088)

## 平安のシンデレラ物語「高藤・列子人形」

新たに  
作成

勧修寺を創建した醍醐天皇の祖父母、平安貴族藤原高藤と宮道列子（たまこ）のロマンスは、山科の地、今の勧修寺で始まりました。二人のロマンスは、「玉の輿の物語」として、今昔物語に伝えられています。また、二人の子孫・紫式部は、この出会いをモデルに、「源氏物語明石の君」の構想を練ったとも言われています。

昨年、区役所主催で実施した「源氏物語の夕べ in 勧修寺」において、清水焼団地協

同組合の協力の下、二人をモデルに作成した「高藤・列子人形」を配布しました。好評であったため、同組合では、これをグレードアップした清水焼の人形を新たに作成しました。玉の輿に乗った列子と高藤の良縁にあやかれるよう、山科の新しい土産物として、組合事務所と勧修寺で販売しています。

問合せ先 清水焼団地協同組合 (☎581-6188)



肖像画家

小林 零さんに感謝状が贈られました

百々学区在住の人物画家の小林零さんは、平成11年から10年間にわたり、毎年敬老の日に合わせ、在宅でお過ごしの方2名の肖像画を描き、贈呈を続けておられます。



贈呈を受けられた方は、肖像画に描かれたご自身の美しい姿を見て感激され、ご家族の方々もよい記念になると大変喜ばれています。

その功績をたたえ、3月23日、区役所において区長より感謝状が贈られました。

問合せ先 区支援課支援第二係 (☎592-3222)

## 区民ボウリング大会

優勝は音羽体振チーム



2月22日、第27回山科区民ボウリング大会が開催され、多くの方の参加の下、熱戦が繰り広げられました。

大会の結果は、次のとおりです。

団体の部

- 優勝 音羽体育振興会チーム
- 準優勝 鏡山体育振興会チーム
- 第3位 百々体育振興会チーム

個人の部

- 男子優勝 音羽学区 門野弘和さん
- 女子優勝 鏡山学区 前田勝子さん

問合せ先 区まちづくり推進課 (☎592-3088)

## 山科の古代を探る

### 第6回 元慶寺



花山院と言えば、巡礼と和歌で知られる天皇だが、その院号に山科区の地名「花山」が含まれるのは、歴史的な理由があった。

寛和2年(986)の夏の夜、まだ19歳だった花山天皇は、忽然として内裏から姿を消した。朝廷中が

大騒ぎとなり、諸山諸寺まで搜索がなされたところ、花山にあった元慶寺で、目もつぶらかな小法師となっているのが発見された。実はこれは藤原兼家のはかりごとで、寵愛していた女御を亡くして悲嘆にくれていた天皇を、兼家一族がうまく言いくるめて出家させ、血縁関係が深い一条天皇を擁立したのである。こうして兼家、子の道長、孫の頼通と続く後醍醐天皇政治が始まったが、退位して花山院となった天皇は、文化・宗教面で大きな足跡を残すことになる。

元慶寺は、当時既に一世紀余りの歴史を持つ、天皇家ゆかりの真言寺院であった。開基は六歌仙の一人、「天津風」の歌で名高い僧正遍昭である。清和天皇の後藤原高子が懐妊した際、遍昭は出産の無事を祈って一寺を建立したが、その願いがかない、生まれた皇子は

やがて即位して陽成天皇となった。そこで元慶元年(877)、年号に基づいて元慶寺と命名されたのである。九世紀後半には、これと同じように天皇個人とかかわりが深く、年号から名付けられた「御願寺」が次々に建てられた。仁明天皇の嘉祥寺、文徳天皇の天安寺、清和天皇の貞観寺、光孝天皇の仁和寺などで、みな平安京周辺の閑静な地にあった。元慶寺の故地についてはなお精査が必要だが、「山城名勝志」によれば、現在の北花山寺内町付近に礎石が残っていたという。応仁の乱で炎上し、ひとたび滅びてしまった元慶寺は、江戸時代に妙心寺の僧によって再興され、現在に至っている。

さて、元慶寺の草創はこのように藤原高子とかかわっていたが、高子という女性については、在原業平との悲恋が「伊勢物語」に綴

られている。高子は兄の藤原基経らによって業平との仲を引き裂かれ、後に立てられたという。高子を失った業平の「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」という痛切な歌は、今も私たちの心を打つ。そしてそれから百年余りが経ち、最愛の女性との離別を悲しんだ花山天皇が、高子ゆかりの元慶寺に入ることになるのだが、そこには何か不思議な因縁が感じられてならない。六歌仙の時代は既に遠く過ぎ去り、中世への扉がゆっくりと開き始めたころのことであった。

京都大学大学院文学研究科

吉川真司教授執筆

「山科の古代を探る」は今回で最終回となります。区内の歴史ある史跡の魅力をぜひ再発見してください。